

A.C.Pigou : The Economics of Welfare.

ピグウ『厚生経済学』

永田清監修訳 Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、

翻訳もまた一つの創作であるとされるならば、書評もまた一つの創作でなければならない。けだし、書評が限られた紙幅の中で著者のいわんとするところを誤りなく伝え、かつ若干の論評を加えることを目的とする以上、翻訳にも増して、評者のヴィジョンとうでを必要とするからである。特に汗牛充棟ただならぬ現今、一冊でも多く良書の心髄にふれたいと願う者の、「書評」の門を叩くこともまた有意義であろう。しかし、筆者はここで右のような型通りの書評を試みんとするものではない。原著者の真意は「書評」という形式を通じて

て必ずしも十二分に伝えられるとは限らず、そこに書評の限界も発見できるし、とどのつまりは原典への橋渡しに終るのが関の山だからである。この意味で、ケンブリッジの碩学ビグウ教授の『厚生経済学』読破の緒となれば幸いである。

小泉信三先生がその『読書論』の中で「大正十二年の大震災に遭って始めて全篇通読した。……一部分は燭火の下で之を読んだ」(一一七頁)といわれるA・C・ビグウの『厚生経済学』は九百頁になんたとするそのボリュームといい、イギリス正統派のエスプリをいかに示した彼一流の理論推究といい、たしかにわれわれをして傾倒せしめるに足る恰好なくつかの条件を具えている。筆者自身始めて厚生経済学の内容に接近したのは、中山伊知郎先生の『厚生経済学』というビグウ教授の学説祖述を目的とする書物入手してからのことである。もとより原著も手にしない者の、接近などとは誠におこがましい次第で、ただ物的な富の原因と性質・その分配の態様を研究するのが経済学の目的であると独断していた当時において、精神的・倫理的な「厚生」ないしは、「福祉」を主題とする経済学の存在に驚きの目を見張った、といった方が適当かもしれない。

「科学を大別すると二つになる、とビグウは云ふ。一つは主として暗黒を照す光明を求めるための科学であり、一つはむしろ人生に有用な果実を求めるための科学である。…経済

学研究の主たる価値は何よりもこれによって社会改造のための指針を獲得することにある、この果実こそは経済学研究のための最も強き拍車をなすものである。若し、カーライルの云ったやうに驚異が哲学の始であるならば、社会的熱情こそはまさに経済科学の始であると云へるであらう」(中山伊知郎『厚生経済学』一頁)。

後年一橋の図書館で部厚い原書を借覧する機会に恵まれたとき、開巻第一章でビグウ自身の文章にひたりえた喜びは今に忘れえない思出となっている。また当時の日記に *Out of the darkness light! To search for it is the task, to find it perhaps the prize, which the "dismal science of Political Economy" offers to those who face its discipline.* (Preface to the 3rd ed., 1928) と書きつづける *"fruit-bearing science"* への忠誠を誓った記憶も生々しい。同時に、「日常生活業務における人間の研究」を目的とする経済学がマリーシアルのそれで、しかもマリーシアルとビグウの師弟関係を知るに及んで、急にマリーシアルの「経済学原理」へと転向した。というよりはむしろ「厚生経済学」の原著を読破するだけの忍耐力を欠き、当時既に大塚金之助先生完訳の「経済学原理」の方がとびつきやすかった、といった方が本当かも知れない(ただし、高村・小島両氏訳「ビグウ・厚生経済学」第一分冊は既に昭和十年に刊行されていたが)。事実マリーシ

アルの「原理」はその紙数において若干「厚生経済学」を上廻る大部なものであったが、何とか通読したという気分にひたりえたのは、ひとえに邦訳のおかげであると今でも感謝している。これと同じような経験は、スミス「国富論」・マルクス「資本論」・カッセル「社会経済学原理」・シュムペーター「理論経済学の本質と主要内容」「経済発展の理論」・ワルラス「純粋経済学要論」等々についてもあてはまり、最近ではケインズ「雇傭・利子及び貨幣の一般理論」についてもまたいえるのではないかと思う。たしかに、ケインズ「一般理論」の完訳が「厚生経済学」のそれに先立ったことは日本の経済学界におけるピグウの位置づけにとって不幸なことであつた。今日、われわれはケインジアンを発見するにさしたる苦勞はいらない。ところで、ピゴロピアンなんと多々たることよ。その由つて来るところ、必ずしも右に尽きないとはいへ、その主要な原因をここに求めるのもあながら誇張とはいえないであらう。しかし、価格分析から所得分析への転機を画し、不完全競争論・失業理論・景気変動論等の発展の契機を与えた功績は依然ピグウに帰せられねばならない。幸い永田清先生監修の「厚生経済学」完訳の朗報に接し、ひそかなる喜びをもちす者、ただ筆者一人だけであらうか。永田先生・福岡助教授の解題は是非とも再読三読をすすめたい。その上で、本文に入つて行くのがまた順序でもある。と

いうのは、ジェヴォンズ・マーシャル以来彫琢された新古典派経済学の分析装置や、時には煩瑣哲學的とも評される程の精緻な原著者の論述は、ともすれば枝葉末節にとらわれて大道を見失わせたからである。わけでも、新しい形での価値判断論争とも目される規範的経済科学の可能性をめぐる問題は、深く英國的な「ものの見方」つまりは正統派の伝統に根ざしたもので、経済人の動機——効用・利潤の極大化——の作用をも併せ考えるとき、次のピグウの言葉は味うべきであらう。「われわれの衝動は知識のための知識を求める哲學者のそれではなく、むしろ知識の助けをもつてもたらし得る治療のための知識を求める生理學者の衝動である」と。経済学に要求される実践性は、斯学がポリテイカル・エコノミーの原理として一ケの学問体系をかちえて以来変らなない。英國正統派経済学からこの実践性を取去るならば、一体後に何が残るといふのであるか。恐らくスロープをとった出しがらだけだろう。英國人は、最も理論的な態度にあるとき、最も実践的な応用に接近できると信じている。「アダム・スミスの自由放任への信頼は——彼が信頼していた限りにおいて——何事も放つておけば、殆んど正しく行動するに違いないという理論的見地よりは、当時彼が見たようなやり方で統治官庁が干渉すれば民衆は殆んど誤つた行動をするに違いないという實際の経験にもとづいたものであつた」(前田新太

郎訳「ピグウ・実践経済学」(一二頁)とみるピグウは「厳密な意味での経済学には何々すべし ought という言葉は存在しない。経済学の務めは、いかなることが起る傾向がある tend を研究することであり、原因と結果の因果関係を辿ることであり、対立する諸力の相互作用を分析することである。経済学は実践科学であつて、規範科学ではない」(同上九六頁)と定義している。たしかに、経済の病理学に思ひを集中することは誰にとつても強い誘惑となるであらう。しかし「病理学は生理学の上に築かれねばならない」(同上二〇頁)。理論経済学者と経済科学者はもとそ的人格を異にすべきものののであらう。というのは「理論は、経済科学の発展において演ずべき価値多き、事実、不可欠な役割をもっている。しかし、それは事実にとつて代らうとするのではなく、これを尊敬するような理論でなければならぬ。各時代毎に二、三人の理論経済学者の席があるだけで、それ以上はない。ただ先天的な推理力をもつ人だけがこのような地位の候補者たることができる。……われわれの残りの者は、整序された知識の建築物を構築するに當つて、着実に一つづつ石を積んでゆくことに満足する経済学者たるべきだ」(金融経済研究会訳「コリン・クラーク経済的進歩の諸条件」(一九四〇年)序文)からである。経済科学者の任務は、理論の車をうまく事実の馬の後につなぐことにある。もしこれに失敗するか、

または理論の車を事実の馬の前につなぐことにのみ専念するならば、いうところの「経済学の危機」はまぬがれないであらう。都留教授のいう如く、経済学は決して経済学であることを許されない。この意味で、その後の新あるいは新々厚生経済学の出現に一顧だに与えないピグウの学風も、あなたがち英国人特有の強がりや頑ななどのみいえないであらう。

それによつても、経済的厚生を増進する条件を求めるのが経済学の大きな課題となつてゐる。近時しばしば用いられる経済的進歩ないしは成長は、簡単にいえば経済的厚生の増進と定義することができよう。ピグウによると、経済的厚生とは慣習上貨幣と交換されるあらゆる財やサービスの豊なることであり、余暇を楽しむこともまた経済的厚生の一つであるから、われわれは経済的成長を、最小限度の労力の犠牲によつて、これらの財やサービスの生産ならびにその他の自然的人工的な稀少資源の生産を益々増加させることと定義することができ。しからば経済的進歩のよつて立つ条件は何か。シジウィックにないピグウの定立する有名な三ヶの令題これである。

- (一) 他の事情にして等しき限り国民分配分の大きさの増加は経済的厚生を増大する傾向を有する。
- (二) 他の事情にして等しき限り国民分配分のうち貧者に帰する割合の増加は経済的厚生を増大する傾向を有する。

(三) 他の事情にして等しき限り国民分配分の可変性の減少は経済的厚生を増大する傾向を有する。

これらの命題はそれぞれ国民分配分（国民所得）と経済的厚生との変動関係を結論的に示したものであるが、それは同時に、厚生経済学の全体系が依拠する理想的規準を表わしたものであって、あらゆる政策的帰結もとのつまりはこの三命題から派生するものといえよう。（松坂兵三郎）